

# 教育新聞

中世の遺跡を発掘すると、青磁や白磁、常滑に古瀬戸、土師器のような土器などが出土する。つい最近までは、青磁や白磁のような輸入品は高級武士の館や寺院などで使われ、庶民は常滑などの陶器を使い、貧しい者は土器を使っていたと思われていた。しかし、実際には都市市民が青磁や白磁を使い、土器は、実は高級武士の酒盛りに消耗品として使われていたことが分かった。文献に頼っていた歴史学は考古学という科学と融合し、土の中から「現実」を私たちの目の前に曝した。

各地で発見される大量の埋納銭は、鎌倉時代すでに貨幣経済が地方の農村にまで浸透していたことを物語っている。鎌倉の大仏は浄光という聖が庶民から集めた銭を鋳造して造ったと記録にあるが、実際に一部を削り成分を分析したら、当時流通していた貨幣に大変近かったことが判明した。

75年に韓国新安沖の海底から発見された元の商船には8000万枚もの貨幣が積まれていた。日本でも使われるために運ばれたのだが、あまりに重いためバラスト代わり船底に敷き詰めてあった。少し前の宋の記録には「日本が大量に貨幣を輸入するのでデフレになった」とも書かれている。

「農村ではたばこや茶などの商品作物の栽培が増え、それとともに貨幣経済が流入し、米使用の経済」が徐々に崩れていった」とは教科書の江戸時代の記述だ。素直に読んだ子どもは

## その4 発掘で分かった生活 生き生きとその時代が見える

「それ以前農村は物々交換だったんだらうな」と思うに違いない。どうかすると先生もそう思っている。実際は大きく異なる。

備中新見の庄には2つの市が開かれ、農産物の換金や年貢の銭納も行われていた。物資は船で高梁川を下り連島で大船に移し替え京に運搬され、割符(しりぎり)による信用取引も行われていた。地頭は秋の収穫時に有力農民の労をねぎらい宴会を開いた。領家への決算報告にはその時にかかった費用を必要経費としてさげ、庄内で生産された鉄を相場の高いときに売

たとき書き記した。実際に鋳物師がいたと思われる遺構は日本の各地から発見されている。農民と融和し相場に長けていた地頭もいたのである。商品経済は思っているより古くから農村にも広まっていたのだ。

## きた歴史学習を取り戻す

玉川学園研究員 多賀謙治

鎌倉時代の人・物・事

当時の日中貿易品で金や工芸品と並び主力輸出品だったのが木材だ。蒙古の侵入で、支配を嫌った人々は南に逃れ南末をつくったが、人口急増は建材や燃料として木の大量伐採につながり「棺桶を作るのにも事欠いた」と記録されている。そんなとき大量の木材を供給していたのが森林国日本だった。阿弭河の農民が伐りだした木材は筏を組んで川を下り、海を渡り、

博多に集積された可能性が高い。新安沖で発見された商船も無事だったら帰りの船で中国へ木材を運んだに相違ない。800万枚の貨幣のうち何割かはその代金だったのかも知れない。

子どもたちの質問には直接授業に関係のあるもの以外に「トイレはどうだったの？」など、学習から生まれた興味が元になっているものも多い。

(おわり)